

特 集

特 集

1 ふるさと環境フェア 2019

(1) ふるさと環境フェアの概要

県では、展示や体験を通して、県民に福井の環境を守り育てることの大切さを考えてもらう機会を提供するため、企業・団体の皆様の協力を得て、ふるさと環境フェア（以下「環境フェア」という）を、平成 21 年度から開催しています。8 回目となる今回は、令和元年 11 月 23 日（土・祝）に福井県産業会館において、「未来へつなげるふくい（わ）～つなげよう！ふくいの豊かな『いきもの』～」をテーマに開催し、当日は延べ約 7000 人の方に来場いただきました。

(2) テーマに込めた思い

まもなく、生物多様性条約第 10 回締約国会議（C O P 10）（2011.10 愛知県名古屋開催）の「生物多様性の 10 年」ラストイヤーを迎えます。我々が住んでいる地球上には、数多くの生物が生息しています。人類は、これらの生物の多様性がもたらしてくれる恵沢なしでは、豊かな暮らしの営みはもとより、生きることすら出来ないと言えます。すなわち、人類の生活や文化は、この生物多様性からの食料、薬および木材等の供給等によって、維持・形成されてきています。

国連が掲げる SDGs（持続可能な開発目標）の中でも、人類の基本的な生存手段である衣食住を担う生態系、生物多様性の持続可能性が、SDGs の達成の極めて重要なテーマです。将来世代にわたって持続的に自然の恵みを得ていくため、今、私たちに何ができるかを真剣に考えることが大切です。

環境フェア 2019 では、このことを考えるきっかけとしてもらうため、福井の豊かな生き物に焦点を当て、様々な企画を実施しました。

(3) 環境フェア 2019 の開催内容

① エントランスゾーン

池田町の木材を使ったすべり台や木のおもちゃで遊べる「木望のゆうえんち」、ヤギやウサギなどの小動物に直接触れることができるふれあい動物園、水月湖の年縞の実物や里山のジオラマ、絶滅危惧種の昆虫の標本などを間近に見ることができるパネル展を実施し、子どもから大人まで見て、触れて、学べる企画となりました。



木望のゆうえんち



ふれあい動物園



パネル展

② 各体験ブース

里山ゾーンや街ゾーンなどのテーマに沿って、合計 41 の体験・展示ブースを設け、来場者に楽しみながら学んでいただきました。中でも、脱プラスチックを目指し開発された大麦ストローや水素で走る燃料電池自動車のカットモデルの展示や試乗は関心も高く、注目を浴びていました。



大麦ストローの工作



燃料電池自動車の展示



コウノトリの剥製展示

③メインステージイベント

会場のメインステージでは、海洋プラスチック問題や生物多様性について考える講演、エコチャレをPRするZEH（Zero Energy House）の紹介など、多くのイベントを行いました。ここでは、そのいくつかについて紹介します。

ア 海洋プラスチック問題セミナー

国際的な問題になっている大量のプラスチック漂流物・漂着物についての対策は、福井県でも大きな課題です。冒険写真家の豊田直之氏に、海底に堆積したり漂流したりするプラスチックごみの写真を通して、海洋プラスチック問題についてわかりやすくお話しいただきました。



海洋プラスチック問題セミナー

イ 平坂寛氏トークショー「捕まえて学ぶ生態学 食べて知る環境問題」

テレビ番組「情熱大陸」にも出演した生き物ライターの平坂寛氏による、生物多様性の問題をテーマにしたトークショーを開催しました。沖縄に南米産のグリーンイグアナが増えつつあることや、特定外来生物に指定されているウチダザリガニが福井でも生息が確認されていることなど、生態系への影響について、「生き物を食べる」という視点からお話しいただきました。



平坂寛氏トークショー

ウ エコチャレのPRとZEHの紹介

環境ふくい推進協議会が実施している事業で、季節ごとにテーマを決めて毎月第3日曜日（家庭の日）に、県下一斉の省エネ行動を行う「エコチャレ」のPRを行いました。ステージでは、県内でZEHを推進する（株）タキナミの佐藤氏に、県民の皆さんの声をまとめた映像を交えて、太陽光発電で創る電力により住宅の光熱費がゼロになるZEHの仕組みを分かりやすく説明していただきました。



エコチャレPR

④福井県の湧水環境保全への取り組み、「ふくいのおいしい水」のPR

平成17年から県が行ってきた、県内の湧水等を「ふくいのおいしい水」として認定する取り組みや、認定地の環境を保全する活動支援について発表しました。「ふくいのおいしい水」がそのまま飲めるように水質の基準を設けていることや、各認定地をガイドブック等を用いてPRし、福井の水環境の良さが分かる内容でした。



ふくいのおいしい水ブース

（4）これからの環境フェアが目指すもの

今回の環境フェアで焦点を当てた失われる生物多様性や海洋プラスチック問題、温暖化による気候変動など、地球を取り巻く環境問題は深刻化しています。これらの問題はメディアを通して知ることもできますが、実際に触れたり、体験したりと実感することが環境問題について考えるきっかけになると考えます。

このため、県ではこの環境フェアについて今後も継続していくとともに、環境保全の意義をしっかりと伝えることのできるフェアにしていきたいと考えています。

2 ふくいプラスチックスマートキャンペーンの推進

県では、海洋へのプラスチック流出を防止するとともに、プラスチックごみの削減・回収・再生利用を推進するため、令和元年度から新たに、ふくいプラスチックスマートキャンペーンを開始しました。

(1) マイボトル運動の展開

県では、ごみの減量化を目指して、プラスチック等の使い捨て容器に替わり、水筒やタンブラーなど、繰り返し使える飲料容器（マイボトル・マイタンブラー）の利用を推進するマイボトル運動を展開しています。

持参したマイボトル等に購入した飲み物を入れてもらえる県内の喫茶店やコンビニなどを「マイボトル運動協力店」として登録し、県のホームページなどに掲載するとともに、目印となるステッカーを配布し、マイボトル対応店舗であることを周知しています。

令和2年1月末で協力店は145店舗となっており、今後も継続して登録店舗を募集し、PRしていくことで、マイボトルの使用促進につなげていきます。

また、マイボトル運動の普及の一環として、10月11日から24日の秋の行楽シーズンに、県内のショッピングセンターやホームセンター、百貨店など30店舗の協力を得て、マイボトルの専用コーナーを設置しました。



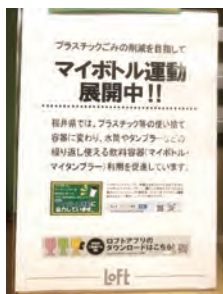
協力店ステッカー



啓発ちらし



マイボトル専用コーナーの一例



専用コーナーの掲示ポップ

このほか、11月26日には、県民や事業者などの海洋プラスチック問題への理解促進を図るため、環境省などから講師を招き、「プラスチック削減戦略セミナー in 福井」を開催しました。

また、10月15日～19日に県庁ホール、11月23日にふるさと環境フェア2019、12月14日につるが環境フェアでプラスチックごみ問題に関するパネル展示を行いました。



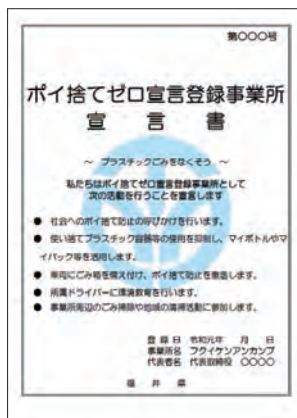
プラスチック削減戦略セミナー



つるが環境フェアの展示

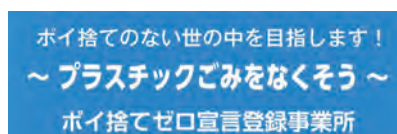
(2) ポイ捨て防止の推進

トラックやタクシー等のドライバーに、マイバッグやタンブラーなどの啓発グッズを配布するポイ捨てストップキャンペーンを、秋の交通安全運動期間を中心に、9月19日、23日、25日（1日2回）、27日、11月12日の合計6回実施しました。



宣言書（例）

また、運輸・旅客事業所を対象に、「ポイ捨て防止の呼びかけ活動」、「マイボトル運動の推進活動」、「ドライバーの環境意識の向上活動」などに協力する「ポイ捨てゼロ宣言登録事業所」を募集しました。登録事業所には宣言書を送付するとともに、事業所の車両に掲示するステッカーを提供しています。



ステッカー



キャンペーンの様子

2月末現在、登録数は30事業所となっており、今後もポイ捨て防止を推進するため、登録事業所数を増やしていきます。

(3) エシカル消費の促進

エシカル消費とは、環境や社会、人、地域に配慮して、モノやサービスを選択することをいい、消費者それぞれが社会的課題の解決を考慮したり、そうした課題に取り組む事業者を応援しながら消費活動を行うことです。たとえば、環境に配慮して、包装が過剰な商品を買わない、詰め替えができる洗剤を選ぶことなどが挙げられます。

県では、エシカル消費を促進するため、環境や社会、人、地域に配慮した商品に付いている認証マークを意識してエシカルな買い物をした方にマイボトルを進呈するキャンペーン「エシカル・チャレンジ2019」を9月～12月に実施しました。



キャンペーンパンフレット

(4) クリーンアップふくい大作戦の実施

県では、地域の環境保全に関する県民の意識啓発を図るため、環境美化活動の統一行動期間を季節ごとに年4回設け、市町や自治会、企業・団体と一体となって地域ぐるみの美化活動を実施しています。

今年度は、9月をクリーンアップ強調月間として、市町や企業が実施する清掃活動に「クリーンアップふくい応援団」を派遣したほか、まちを歩きながらゴミを拾う「クリーンウォーキング」や、競技形式で楽しくゴミを拾う「スポーツGOMI拾い大会」を開催するなど、県内各地で様々な環境美化活動を展開しました。



クリーンウォーキング



スポーツGOMI拾い大会



3 コウノトリの野外定着

県では、特別天然記念物であり生態系の頂点に立つコウノトリを自然再生のシンボルと位置付け、兵庫県立コウノトリの郷公園からペアを借り受けて共同研究として飼育・繁殖・放鳥事業を行っています。平成 27 年から 30 年にかけて、越前市で生まれたヒナ 9 羽を越前市内で放鳥しました。地域の方々とコウノトリが生息する環境づくりに取り組むことで、コウノトリの保全や、結果的に生態系をまるごと大きく保全していくことを目指しています。

(1) 飼育コウノトリの繁殖制限

平成 30 年に飼育コウノトリペアが福井県で初めて産んだ有精卵から生まれた 3 羽を放鳥しました。次年度から数年間は同ペアの子の放鳥はしないこととしています。

日本のコウノトリは一度野生絶滅していますが、狩猟、営巣場所となるアカマツの減少、農薬に加え、近親交配が大きな原因と言われています。飼育・野外を問わず、日本の全てのコウノトリには個体番号を付け、血統登録書に情報を記載しています。このデータを繁殖シミュレーションソフトで解析し、将来の野外コウノトリ個体群の遺伝的多様性が保たれるような放鳥個体の選定を、日本国内全ての飼育施設が共同で行っています。

福井県でもペアの産んだ卵が無精卵であったことから、他のペアの有精卵とすり替える「托卵」を行ってききましたが、これもシミュレーションソフトでの解析を元に提供された卵を用いており、コウノトリの戦略的な野生復帰のために行われてきたことでした。



飼育コウノトリペア（越前市中野町）

(2) 県内では 55 年ぶりとなる野外でのコウノトリの孵化

令和元年 5 月 9 日、越前市安養寺町の人工巣塔で、野外では 55 年ぶりにコウノトリが孵化しました。父親は福井県が放鳥した個体ですが、子育てには失敗しました。経験不足からか、一般的に初めての繁殖は失敗することが多いようです。

(3) 県内では 58 年ぶりとなる野外でのコウノトリの巣立ち

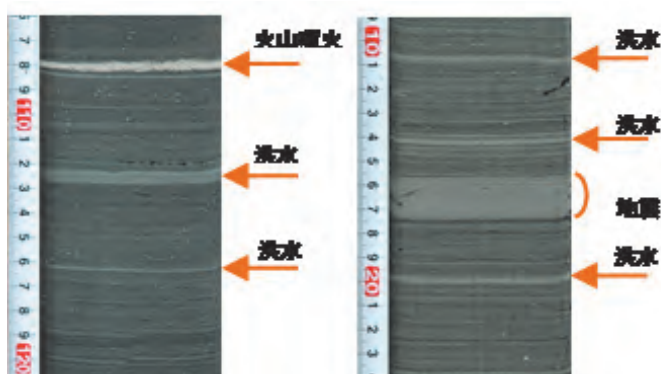
坂井市では別のペアが鉄塔や住宅街の電柱に繰り返し巣作りをし、感電死やそれに伴う停電を防ぐため巣材が次々に撤去されてきました。最終的に巣作りした場所がたまたまバイパス可能な電柱であり、住民の方々がコウノトリの繁殖を受け入れることを決断、北陸電力株式会社の社会貢献活動としてバイパス工事が実施されました。その後、産卵、孵化に至り、両親は仲良く落ち着いて 4 羽のヒナを無事に育てました。幼鳥 4 羽は 7 月下旬から 8 月上旬にかけて次々と巣立ちました。この巣立ちは昭和 36 年 5 月に小浜市でコウノトリの幼鳥 2 羽が巣立って以来、野外では 58 年ぶりとなりました。



坂井市で産まれたヒナ 4 羽（令和元年 7 月）

4 年縞博物館開館1周年を迎えて

三方五湖の一つである水月湖の湖底には、およそ7万年の歳月をかけて積み重なった「年縞（ねんこう）」とよばれる縞模様の地層が形成されています。水月湖の年縞は、考古遺物などの年代を測る「放射性炭素年代測定法」の補正に利用され、その精度を飛躍的に向上させたことから、「世界標準の年代のものさし」とよばれています。また年縞に含まれる花粉や火山灰などから、過去の気候や環境の変化を知ることができます。この年縞をテーマにした「福井県年縞博物館」は、令和元年9月に開館1周年を迎えました。



水月湖の年縞
(火山噴火や洪水の跡が残っている)



年縞博物館（外観）

(1) 年縞博物館の取り組み

年縞博物館には、令和2年3月時点で、8万人を超える方に来館いただいています。また、展示内容やナビゲーターによる解説が好評を博し、アンケート結果でも満足度が9割を超えるという高評価をいただいています。

令和元年は特別企画展「古代エジプト文明 -気候変動と水辺の民-」（8月1日～9月30日）を開催し、2か月間で1万5千人を超える方に観覧いただきました。記念講演では吉村作治氏（東日本国際大学学長）を講師としてお招きし、約300人の方に来場いただきました。



特別企画展の様子



吉村作治氏による記念講演

(2) 今後の展望

立命館大学との共同研究により水月湖年縞の科学的な価値をさらに向上させるとともに、国内外に博物館をPRすることで、福井県の教育や観光に貢献していきます。また、特別企画展などのイベントを定期的に行い、リピーターの確保にも努めていきます。